

第29回 考古資料展

伊勢原の遺跡

—発掘調査の現場から—



伊勢原市教育委員会

公益財団法人 かながわ考古学財団

《展示遺跡》

1	西富岡・向畑遺跡	(公財) かながわ考古学財団	1～2
2	糟屋館跡遺跡①	(公財) かながわ考古学財団	3～4
3	糟屋館跡遺跡②	(公財) かながわ考古学財団	5～6
4	糟屋館跡遺跡③	(公財) かながわ考古学財団	7～8
5	上粕屋・和田内遺跡	(公財) かながわ考古学財団	9～10
6	上粕屋・石倉中遺跡第2地点	(公財) かながわ考古学財団	11～12
7	子易・中川原遺跡		
	子易・大坪遺跡	(公財) かながわ考古学財団	13～14
8	田中・第六天遺跡第3地点	(株) 玉川文化財研究所	15～16
9	田中・第六天遺跡第4地点	(株) 玉川文化財研究所	17～18
10	(仮称) 桜台一丁目遺跡	(有) 吾妻考古学研究所	19～20
11	(仮称) 沼目二丁目遺跡	(有) 吾妻考古学研究所	21～22

伊勢原市内では、新東名高速道路建設事業や厚木秦野道路建設事業、県道 603 号線道路改良事業に先立ち発掘調査が行われ、数多くの遺跡が見つかっています。今回は、最新の調査成果を展示しました。

本展示は、公益財団法人かながわ考古学財団と共催し、株式会社玉川文化財研究所、有限会社吾妻考古学研究所、また、中日本高速道路株式会社の御協力をいただきました。

1 ^{にしとみおか}西富岡・^{むこうばた}向畑遺跡

所在地 伊勢原市西富岡地内

調査期間 平成 19 年 4 月 1 日～調査中

調査面積 16,886 m²(平成 27 年度分)

遺跡の立地 西富岡丘陵の西側、渋田川沿いの東側に挟まれた台地上に位置し、標高 50m 前後の西向きの^{ゆる}緩やかな斜面と平坦地にあります。本年は県道 63 号線沿いと、西富岡丘陵沿いの台地の調査を行いました。

調査の成果 本遺跡では、近世・中世・古代・古墳・縄文・旧石器時代の調査を実施し、遺構や遺物を発見しました。

近世以降の主な遺構は、区画溝を持つ^{ほっ}掘立柱建物跡^{たてばしらたてものあと}と井戸です。県道 63 号線沿いの調査区で確認しました。さらに、道路西側の調査区では、柱痕・井戸・区画溝を検出しました。街道両脇に屋敷が存在した可能性があります。遺物は、17 世紀～近代の陶磁器や銭貨、^{きせる}煙管等が出土しました。注目すべき遺物として、17 世紀の良質な^{ひぜん}肥前産の陶磁器や、近代ではヨーロッパ産の皿が挙げられます。後者はこの地域で出土するのは珍しく、豊かな生活をしていた事が考えられます。

中世では、渋田川沿いの調査区で流路を検出しました。この中からは、16 世紀の羽子板 1 対と下駄が出土しました。また、そこから 400m 程東の平坦地では、14 世紀の浅い掘り込みを伴う掘立柱建物跡を検出しました。他遺跡の類例から、掘り込みの中で、馬または牛を飼育していた可能性が考えられます。

古墳時代から古代にかけては、竪穴住居跡や掘立柱建物跡を検出しました。遺物は^{はじき}土師器・^{すえき}須恵器・^{とうす}刀子等の鉄製品が出土しました。9 世紀中頃の竪穴住居跡からは^{かいがたつき}甲斐型坏と呼ばれる土師器が出土し、他地域との交流がうかがえます。今回の調査で、多数の住居が検出された丘陵寄りの台地と比較して、丘陵から西側にいくにしたがって住居の分布は希薄になることが判明しました。

縄文時代は、過去に調査した縄文時代の埋没谷の西側と南東側で、中期後半～後期前半にかけての住居跡を検出しました。

中期後半の J19 号住居からは、残存状態の良好な^{うめがめ}埋甕が 2 点出土しました。この住居跡は建て替えを 2 回行ったと考えられます。埋甕も建て替えに伴って埋設されました。住居跡は手狭になれば、建て替えを行うことがあります。また、後期の住居跡では、床面に平らな石を敷いた^{えかがみがた}柄鏡形^{しきいしじゅうきよあと}敷石住居跡が検出されました。

旧石器時代では、20,000 年前頃の石器製作跡を一基検出し、黒曜石で作られた小型の^{やりさきがたせんとうき}槍先形尖頭器が出土しました。また、これより古い 22,000 年前の地層から炭化した木材が出土しました。この炭化材の樹種が判明すれば、この時代の気候がわかる手がかりとなり、環境を知る上で貴重な資料です。



写真1 区画溝



写真2 羽子板



写真3 古代面全景



写真4 小型の槍先形尖頭器



写真5 縄文時代中期後半 竪穴住居跡

2 ^{かすややかたあと}糟屋館跡遺跡①

所在地 伊勢原市上粕屋地内

調査期間 平成 27 年 4 月 1 日～調査中

調査面積 2,051 m²

遺跡の立地 本遺跡は、小田急線伊勢原駅の北西約 2.5 kmの上粕屋秋山・辻付近の標高 50～55mほどの 2 つの丘陵上に立地しています。丘陵の北東側には渋田川の支流が流れています。

調査の成果 調査箇所は 3 箇所あり、26 地区、27 地区、28 地区と呼称しています。26 地区は東側に位置する丘陵頂部、27 地区は東向きの緩斜面が調査箇所となっており、28 地区は道路を挟んだ西側の丘陵の北向きの斜面地とその下の平坦部が調査対象範囲となっています。

東側の丘陵頂部に位置する 26 地区では、近世の^{だんぎ}段切り・^{みぞじょういこう}溝状遺構・^{どこう}土坑、中世の段切り・溝状遺構などの遺構が発見され、近世には畑地として利用されていたことが判明しました。

東側斜面に位置する 27 地区では、近世の段切り・溝状遺構・土坑、古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての段切り・溝状遺構・^{たてあなじゅうきよあと}竪穴住居跡・^{ほったてぼしらたてものあと}掘立柱建物跡・^{こうかめん}硬化面・土坑、縄文時代の^{しゅうせき}集石などの遺構が発見されました。

古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの遺構は、緩斜面で発見されました。竪穴住居跡は 8 軒見つけられました。全体を確認できなかったものもありますが、規模は一辺 5.5

～6.5mの正方形を呈するものが主体を占めており、いずれもカマドを有していたと思われます。カマドは北側または西側に設けられていました。住居跡からは^{かめ}甕や^{つき}坏などの土器のほか、^{まがたま}勾玉や^{とうす}刀子といった石製品や鉄製品が出土しています。掘立柱建物跡は、竪穴住居跡に切られていたり、調査区外に延びていたりして全体が確認できたものではありませんでしたが、6 棟以上が存在していたものと思われます。柱穴の直径は 50～60 cmが主体を占めていて、柱間の距離は 1.9～2.0mを測ります。規模は 2 間×3 間かそれ以上あったと思われます。竪穴住居跡や掘立柱建物跡は他の遺構と重複する例が多く認められました。このことから、集落が比較的長期にわたって営まれていたことが想像できます。

縄文時代の集石は、調査区の東側で 10 基発見されました。集石は^{むしや}蒸焼きなどの調理をした施設と考えられており、焼けた石が数十個から数百個まとまった状態で見つかります。今回発見された集石の中には、規模が直径 1 mを超えるものがありました。石の多くはよく焼けており、中にはひび割れたものが認められたことから、同じ施設または同じ石を何度も利用していた可能性が考えられます。

西側の斜面に位置する 28 地区では、渋田川の支流に接する平地部分で、旧河道が発見されました。以前の川は今よりやや南側を流れていたことが判明しました。



写真1 27地区 古墳時代後期～奈良・平安時代全景



写真2 H1号竪穴住居跡



写真3 竪穴住居跡遺物出土状況



写真4 27地区 縄文時代集石



写真5 26地区 中世段切り

3 糟屋館跡遺跡②

所在地 伊勢原市上粕屋地内

調査期間 平成 27 年 4 月 1 日～調査中

調査面積 6,560 m²

遺跡の立地 伊勢原市上粕屋に位置する糟屋館跡は上杉定正の居館跡に推定されています。標高 60m ほどの上粕屋扇状地に立地し、重複して上粕屋・秋山上遺跡や上粕屋・神成松遺跡などがあり、縄文時代から中世、近世の遺跡が見つっています。

糟屋館跡は、東西 1.6 km、南北 0.7 km の東西に長い平坦な舌状台地に位置し、その西端に位置する御伊勢森遺跡では、昭和 50 年から翌年にかけて産業能率大学建設に先立って発掘調査が行われました。その調査では、「館」としての明確な遺構は発見されませんでした。中世の建物跡と南北に走る深い横断面が V 字状の大溝やそれに沿った土手が確認され、ここが扇谷上杉氏の居館と推定されました。しかし、糟屋館跡の範囲内では、糟屋館跡「大門跡」の石碑が建立されているなど候補地は各所に残されています。また南 500m には太田道灌の墓所が残る洞昌院が位置しています。

調査の成果 20 地区の調査では縄文時代の谷に面した傾斜地から、中世～近世にかけての大きく段切りした平場から掘立柱建物や斜面を利用した洞木を渡したところに礫を積んで水をためる貯水施設（写真 5）が発見されています。他に石臼が検出された井戸（写真 6）や台地の周辺を区画する堀（写真 4）も発見されています。水利施

設としての水場遺構の木組井戸も谷の中から発見され、中世～古代にかけての活動の痕跡が、台地の高台の奈良・平安時代の住居とともに確認されています。

調査区西側に位置する縄文時代の谷（写真 1）は、最も深いところで 10m 以上あり、南から北に向かい緩やかに傾斜していません。谷底からは多量の縄文土器片や石器・礫が分布し、台地の上と連動して、遺跡が形成されていたことが推定できます。

21 地区では、奈良・平安時代の集落が発見されました。竪穴住居 4 軒と掘立柱建物から構成され、壁高 1.0m を測る非常に深い竪穴住居（写真 3）が発見されました。また、縄文時代後期の配石遺構（写真 2）が径 30m の範囲から 9 基検出され、大型の石皿や石棒を起立させた配石遺構が発見されています。無頭の石棒は、近くから出土した頭部が接合し完形に復元されました。立石や掘り込みを有する配石もあり、まわりからは竪穴住居等の遺構も見つからず出土遺物も少なく、集落内では一定の聖域が想定されます。また、中世までさかのぼる可能性のある堀や土坑墓なども見つかり、22 地区で見つかった 17 世紀代の堀などとあわせ、まだその位置が確定していない糟屋館跡発見の糸口となる調査と期待されます。中世から近世に移り変わる伊勢原の姿を考えるために、今後も続く糟屋館跡周辺の発掘調査の成果を注目しましょう。



写真1 縄文時代の谷(20地区)



写真2 縄文時代の配石遺構(21地区)



写真3 奈良・平安時代の竪穴住居(21地区)



写真4 中世堀(20地区)



写真5 近世の貯水施設(20地区)



写真6 近世の石臼出土状況(20地区)

4 ^{かすややかたあと}糟屋館跡遺跡③

所在地 伊勢原市上粕屋地内
(伊勢原市 No. 74 遺跡・糟屋館跡、
伊勢原市 No. 205 遺跡)

調査期間 平成 27 年 5 月 1 日～調査中

調査面積 2,400 m²

遺跡の立地 伊勢原駅から北西約 3 km にある台地の東側に位置する谷戸平坦部^{やとへいたんぶ}に立地しています。

調査の成果 近世の遺構は溝状遺構^{みぞじょういこう}、土坑^{どこう}、ピットなどが見つかっています。特に溝状遺構は北東から南西方向に掘られているものと、それに直行するように掘られているものが確認されました。これらは耕作などに関する遺構と考えられます。

中世の遺構は溝状遺構、土坑、ピットなどが見つかっています。溝状遺構では調査区を縦断するような大きな遺構(写真 4)を確認しました。この遺構は幅 6～7 m、深さ 2 m 前後で水利用のための用水路の役割も持っていた遺構であったのではないかと考えられます。また、この遺構のすぐ横から見つかった土坑からは馬の歯(写真 1)が見つかっています。

古墳時代の遺構は土坑が 1 基見つかっています。土坑内からは古墳時代中期のものと考えられる高坏^{たかつき つきぶ}の坏部が見つかっています(写真 2)。

縄文時代の遺構は土坑が 3 基見つかっています。いずれの土坑も獲物を捕るための陥穴^{おとしあな}であったと考えられます。3 基の陥穴の中には陥穴の底に先端を尖らせた杭など

を固定するための小穴が掘られているもの(写真 3)も見つかっています。

また、人為的に作られたものではありませんが、むかしの川の流れた痕跡と考えられる自然地形も確認されました(写真 5)。



写真 1 馬の歯出土状況



写真 2 高坏出土状況



写真 3 土坑(陥穴:おとしあな)



写真4 溝状遺構



写真5 旧河道（自然地形）

5 上粕屋・和田内遺跡

所在地 伊勢原市上粕屋 2916-1 番地他

調査期間 平成 26 年 11 月 1 日～調査中

調査面積 3,916 m²

遺跡の立地 本遺跡は、伊勢原市上粕屋字和田内・一ノ郷・和田内下周辺の台地上及びその下一帯に広がっており、調査地は遺跡範囲の南端に位置します。遺跡は、大山に端を発する河川によって作られた小谷戸の一つに立地します。調査地は、和田内の小谷戸内の中程に位置し、南東方向に傾斜する斜面の裾付近です。これまで、本調査地の所在する小谷戸一帯では、奈良・平安時代～中世にかけての遺構が多数確認されており、該期の人的活動が盛んであったことをうかがわせます。

調査の成果 今回の調査(平成 26・27 年度)では、旧石器時代～近世・近代まで幅広い時期の遺構・遺物が発見されました。

近世では、耕作に関連すると考えられる畝跡やそれを区画する溝が発見されました。この時期では、後述する段切り状遺構が埋まった後に利用されたようです。

中世では、大きく二時期に分けられる遺構が発見されました。新しい時期の中世 1 面では、大きな段切り状遺構が特筆されます。斜面の裾にあたる南側をより傾斜が急になるように削っています。途中で平坦面を作りながら、少なくとも 2 段以上はあったと考えられます。この平坦面では、溝が発見され、排水を目的としていたと推測されます。この段切りは、これまで約 120m 以

上確認されていますので、南・南東に傾斜する斜面の裾を大規模に造成していたと考えられます。この段切り状遺構以外では、大きな建物などは見つかりません。

古い時期の中世 2 面では、建物が発見されましたが、簡素なものでした。

奈良・平安時代では、^{たてあなじゅうきよあと} 堅穴住居跡が 11 軒発見されました。また、一段高い斜面上の平坦面では、^{ほったてぼしらたてもものあと} 掘立柱建物跡が 2 棟発見されました。この時期に該当する遺物の出土量が多く、利用が盛んであったといえます。

古墳時代では、堅穴住居跡が 5 軒発見されました。古墳時代から奈良・平安時代の遺構は、近隣でも非常に多く発見されており、斜面裾が広く利用されていたと考えられます。

縄文時代では、^{しきいしじゅうきよあと} 敷石住居跡 5 軒、堅穴住居跡 5 軒が発見されました。火災後に廃絶したと推測される住居跡も発見されました。住居の構築材と推測されるものや被熱した土が見つかりました。J 3 号住居からは、珪化木製の石棒が発見されました。住居の入口と本体の付け根から、横になって見つかりました。これら住居跡や周りからは、縄文時代後期の土器が多く見つかりました。住居群より古い時代からは、集石や焼土跡が発見されました。さらに古い時代からは、^{おとしあな} 陥穴も見つかりました。

時代によって利用方法は異なりますが、長い間斜面や裾の平坦面を利用していたことがわかりました。



写真1 中世1面全景 (1区)



写真2 古代面全景 (5・6区)



写真3 H4号竖穴住居跡 (1区)



写真4 F2~5号竖穴住居跡 (1区)



写真5 J3号竖穴住居跡 (1区)



写真6 J3号竖穴住居跡焼土・炭化物 (1区)

6 上粕屋・石倉中遺跡(第2地点)

所在地 伊勢原市上粕屋 1493-2 他
調査期間 平成 25 年 9 月 16 日～調査中
調査面積 3,355 m²
遺跡の立地 遺跡は大山から伸びる鈴川が形成した扇状地、鈴川の谷とその東の^{かたに}潤谷に挟まれた段丘上に所在しています。遺跡が立地する段丘は両側が急峻な崖線となり、南側に向かって^{ゆる}緩やかに下っています。遺跡周辺の標高は 88m ほどです。昨年度に引き続き段丘を東西に横断するように発掘調査を行っています。今年度は昨年度から継続する調査地点 1 c 区の旧石器時代の調査と、その南側にあたる 1 h 区および西側の 2 b 区の調査を実施しました。

調査の成果 これまでの調査で、旧石器時代、縄文時代、古墳時代、近世の各時代の遺構・遺物が発見されています。今年度はこれまでに 1 c 区で旧石器時代の^{さいせきじん}細石刃の製作跡、1 h 区で近世の^{どきしやうせいがま いしだん}土器焼成窯・石段・^{ねんど}粘土(ローム)採掘土坑、^{ちかしきこう}中世の地下式坑、縄文時代後期とみられる^{はいせき}配石、2 b 区で縄文時代後期の^{しきいしじゆうきよあと}敷石住居跡が発見されています。

近世の遺構として注目されるのは 1 h 区で発見された土器焼成窯です。土器焼成窯とは「かわらけ」「ほうろく」「火鉢」「植木鉢」といった低い温度で焼成される素焼きの焼物を焼いた窯です。これらの焼物は江戸時代の遺跡から多数出土する一方で、その焼かれた窯については瀬戸・美濃や常滑・肥前といった遠くの窯業地ではなく、

比較的消費地に近い地元の窯で焼かれたことが想定されてきましたが、窯そのものが考古学的に調査されることはほとんど無く、近年まで操業を続けてきた東京都墨田区の「今戸焼」などいくつかの窯を除けば、どこで焼かれたかもよくわかっていませんでした。今回の調査はそうした窯の一つが発見されたわけで、近世の^{ようぎやう}窯業また伊勢原の地域史を考えていく上で非常に重要なものとなりました。

また、窯の周辺からは 25 年度から続けてきたこれまでの調査で水車小屋跡や水路跡、粘土(ローム)採掘土坑などが発見されています。粘土(ローム)採掘土坑で掘った粘土(ローム)を水車小屋の臼で砕き、水路の水で^{すいひ}水簸して精製した粘土で製品を作り乾燥させた上で土器焼成窯で焼いたとすれば、窯業に係る一連の施設がすべてそろっていることになり、そうした意味でも非常に注目されます。

旧石器の調査ではローム層(B0層)中から、細石刃と細石刃核、その素材となるブランクが多数出土しています。またこれら以外にも多数の^{はくへん}剥片が出土していることから、細石刃関連資料の石器製作が盛んに行われたものと判断されます。これら旧石器時代の遺物の総点数は現在 2,000 点を超えています。また、遺物の集中する箇所から一抱えもある大きな石が複数発見されています。配石と呼称していますが、その性格については今後の検討課題です。



写真1 土器焼成窯(近世)



写真2 細石刃出土状況(旧石器時代)

7 子易・大坪遺跡 子易・中川原遺跡

所在地 伊勢原市子易地内
調査期間 平成 26 年 11 月 1 日～調査中
(子易・大坪遺跡 10 区東・10 区西)
平成 25 年 7 月 16 日～調査中
(子易・中川原遺跡 1 区北・1 区北
拡張区・1 区南拡張区・1-2 工区)
調査面積 1,290 m² (子易・大坪遺跡)
5,277 m² (子易・中川原遺跡)

遺跡の立地 子易・大坪遺跡および子易・中川原遺跡は、伊勢原市西部の子易地区に所在し、大山に源を発する鈴川右岸の河岸段丘上および丹沢山地南東山麓の斜面上に立地しています。子易・大坪遺跡は、鈴川右岸の段丘上、標高 110m 前後に占地し、子易・中川原遺跡は同じく鈴川右岸の標高 120m 前後の地点に位置します。

調査の成果 子易・大坪遺跡 10 区東では、縄文時代後期の配石遺構群（配石墓含む）および土坑墓群が見つかり、現在も調査中ですが、これまでに配石遺構 80 基、配石墓 43 基、土坑墓 30 基などが発見されています。それほど広くない範囲にここまでお墓が密集するのは、全国的にも珍しい事例として注目されます。土坑墓および配石墓には、副葬品として土器が入れられたものがありますが、同じ縄文時代後期中葉（約 3,500 年前）の土器でも、土坑墓からは加曾利 B1 式土器、配石墓からは加曾利 B2 式土器が主体となって発見されていて、土坑墓群から配石墓群へ変遷したことがうか

がえます。また、空間的にも土坑墓群の分布域と配石墓群の分布域には相違が見られ、一部重複しながらも、分布域を変えながら、墓域として継続的に利用されていたことがわかります。

子易・大坪遺跡 10 区西は、10 区東よりも急斜面ではありますが、やはり列石状に組まれた配石遺構群が見つかり、また、周辺からは加曾利 B2 式土器を主体とする多量の縄文土器とともに堅穴住居跡も数軒確認されており、該期の集落が存在したものと推定されます。同時期の墓域と集落が同時に調査されることは貴重です。

子易・中川原遺跡では、前年度までに発見されていた中世の池状遺構を中心に調査が進められていますが、池の造成に関わる堤状遺構の構造が明らかになってきました。堤の池側には杭が打たれ、さらには木材や竹、葦簀などが柵（しがらみ）状に組み、土堤の強度を増すための地業が行われています。また、明治時代まで当地にあったと伝わる和銅山安楽寺という寺院に直接関わる基壇跡や石垣、石段、石造物などが発見され、さらに周辺からは中世にまで遡ると推定される礎石建物跡や基壇跡なども確認されています。池状遺構とともに、中世段階における大規模な地業の様相が徐々に明らかになってきました。



写真1 調査区全景（子易・大坪遺跡10区西・10区東）



写真2 配石墓群近景（子易・大坪遺跡10区東）



写真3 配石墓副葬土器（子易・大坪遺跡10区東）



写真4 池堤杭列（子易・中川原遺跡1区北）



写真5 礎石建物跡（子易・中川原遺跡1区南）

8 田中・第六天遺跡第3地点

所在地 伊勢原市伊勢原四丁目 599 番地先

調査期間 平成 26 年 9 月 2 日～12 月 18 日

調査面積 1,335 m²

遺跡の立地 田中・第六天遺跡第3地点は伊勢原市中央部の東寄りに所在し、小田急電鉄小田原線伊勢原駅より北方約 0.6 km、伊勢原市役所より南南西約 0.3 km に位置します。

地形的には大山山麓から南東へ派生した伊勢原台地の北縁部に該当します。周辺の地形は南西から北東に向かって緩やかに傾斜しており、現地表面での標高は、調査区南西の台地部で約 36m、中央の台地肩部で約 33m、北東の斜面部で約 29m を測ります。遺跡東方約 0.8 km の渋田川沖積地との比高差は 8～15m 前後となります。

調査の成果 田中・第六天遺跡が立地する伊勢原市田中地区は、沼目地区、池端地区、東大竹地区とともに、市内で有数の古代遺跡包蔵地として知られています。田中・第六天遺跡範囲内では、本地点を含めて 4 カ所の発掘調査が行われており、発見された古代竪穴住居は現時点で 50 軒以上を数えます。

今回の調査では、既知の成果と同様に古代（古墳時代後期～平安時代）に属する集落が発見されました。また、少量ではありますが、縄文時代の遺物、中世以降の遺構・遺物なども検出されています。

出土遺物の内訳は、縄文時代の土器、石器、古代（古墳時代後期～平安時代）の土師器（坏・甕）、須恵器（坏・蓋）、灰釉陶器（碗・長頸瓶）、土製品（管状土錘）、石製品（砥

石、凹石、敲石）、鉄製品（雁股鍬、柳葉鍬、刀子）、中世以降の陶器、磁器などで、総量は中テン箱で約 18 箱分を数えます。このうち主体をなすものは古代の土器群で、器種としては土師器坏・甕類が大半を占めます。

縄文時代の調査では、主に台地平坦部～肩部の包含層中より前期後葉諸磯式土器、中期後葉曾利式土器、後期前葉堀之内式土器、後期中葉加曾利 B 式土器が少量と石器（石鍬）1 点が出土しましたが、当該期の遺構は発見されませんでした。

古代の調査では、7 世紀前葉から 10 世紀後半に属する集落が発見されました。遺構の内訳は竪穴住居址 28 軒、土坑 14 基、溝状遺構 5 条、ピット列 1 列などで、これらは大きく 7 世紀前葉～8 世紀前葉、8 世紀中葉～9 世紀初頭、9 世紀前葉以降に時期区分することができます。

7 世紀前葉～8 世紀前葉では竪穴住居址 16 軒および断面 V 字の大規模な溝状遺構 1 条などが検出されました。周辺調査地点の分析から、本時期の集落は台地部から低地部まで広く展開し、さらに遺構および遺物の数量も卓越しており、田中・第六天古代集落の最盛期と位置付けることが出来ます。住居の基本構造は、西壁中央に長い煙道部を持つカマドが構築され、4 本柱の主柱穴を有しています。

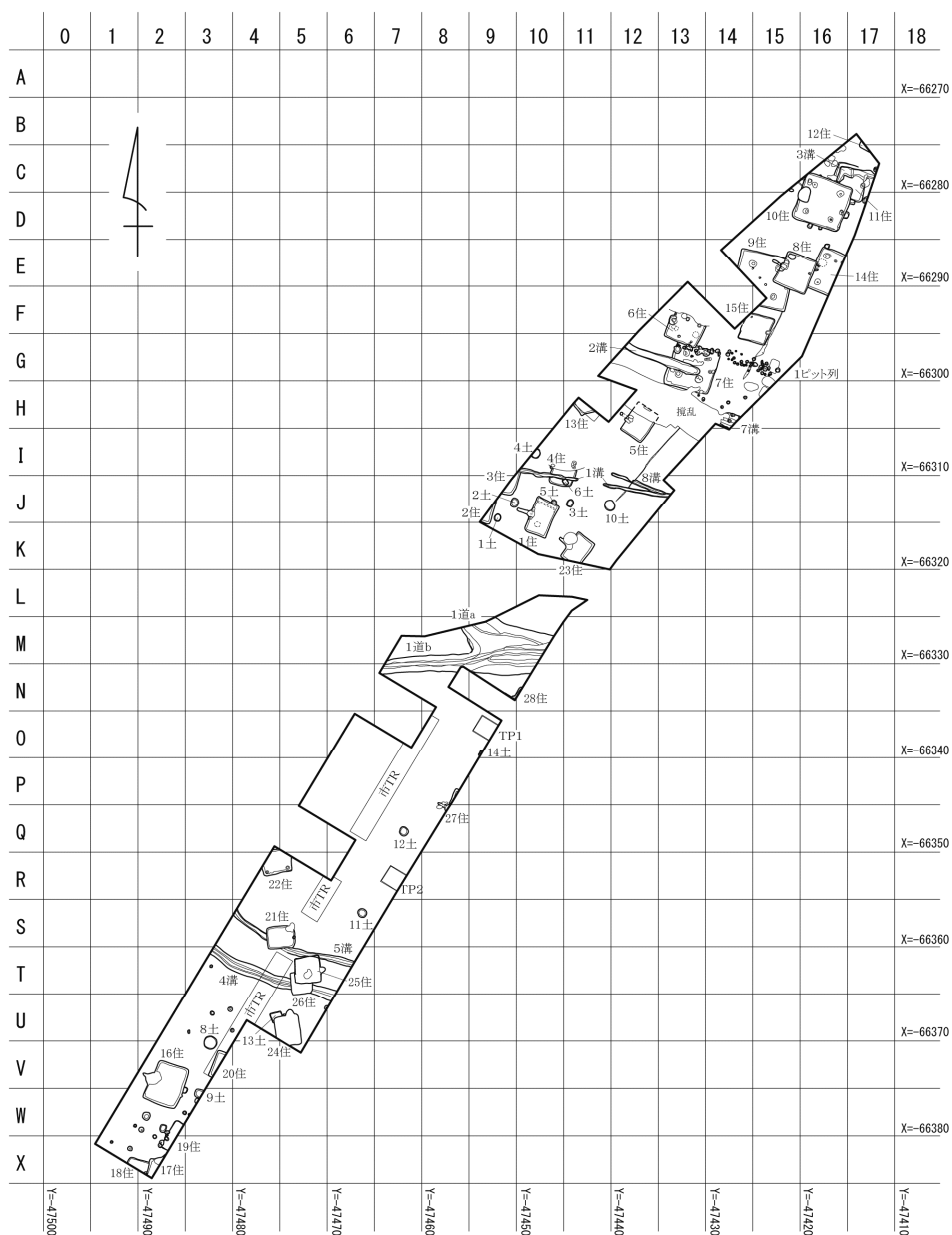
8 世紀中葉～9 世紀初頭では竪穴住居址 3 軒などが検出されました。これらは台地部から斜面部にかけて散在しています。本時期に

属する住居の特徴としては、多数の床下土坑^{ゆかしたごう}が構築される点あげられます。

9世紀前葉以降では竪穴住居址7軒などが主に台地部より検出されました。本時期に属する住居の形態的特徴としては、住居規模の縮小およびカマド構造の簡素化などがあげられます。このうち10世紀後半に下る4号住、25号住などが、田中・第六天古代集落の終末

期の遺構と考えられます。

中世以降の調査では、東西方向の道路遺構2条と溝状遺構2条が検出されました。このうち道路遺構の上面に宝永火山灰^{ほうえいかざんばい}(宝永4-1707年降灰)が堆積しており、2条の道路遺構は調査区中央で合流して三叉路^{さんさろ}となります。さらに本址の北側約8mには道筋をほぼ同じにする現行道路の三叉路が位置しています。



田中・第六天遺跡第3地点遺跡全体図 (1/800)

9 田中・第六天遺跡第4地点

所在地 伊勢原市伊勢原四丁目 755-3 番地先

調査期間 平成 27 年 9 月 24 日～12 月 4 日

調査面積 590 m²

遺跡の立地 本遺跡は伊勢原市中央部の東寄りに位置し、地形的には大山山麓から派生した伊勢原台地の北縁部に所在します。本調査地点は標高 36m ほどの台地上に立地しています。

調査の成果 今回の調査では、古墳時代後期から奈良・平安時代に属する竪穴住居址 9 軒、竪穴状遺構 1 基、掘立柱建物址 3 棟、土坑 13 基、ピット 122 基、中世に属する溝状遺構 4 条、ピット 2 基を発見しました。

古墳時代後期から奈良・平安時代は、今回の調査で主体となった時期です。7 世紀後半の住居址は、3・7・9 号の 3 軒です。調査区全体に分布しており、当該期の集落の広がりを想定できます。8 世紀前半の住居址は、1・6・8 号の 3 軒で、7 世紀後半と同様に調査区全体に分布します。8 世紀半ば以降は軒数が減少し、8 世紀後半が 1 軒（5 号）、9 世紀前半が 1 軒（4 号）、9 世紀後半が 1 軒（2 号）と、まばらに散在する程度になります。

出土遺物は、各時期を通して土師器が主体で、須恵器や灰釉陶器は少量です。1 号住居址の覆土中からは遺物収納箱で 13 箱分の多量の遺物が出土した点は注目されます。出土遺物は土師器の坏・甕類が主体で、東海地方の須恵器類が含まれます。須恵器は蓋・坏類が主体で、甕・

瓶類はわずかです。蓋・坏類は、有台坏とそれともなう摘み蓋が主体を占めます。1 号住居址の覆土各層から出土した破片は、住居内で接合するものも多いことから、短期間に一括廃棄されたものと推測されます。

掘立柱建物址は 3 棟検出され、そのうち 2 棟（1・3 号）は桁行 3 間×梁行 2 間の建物で、すべて側柱建物です。いずれも小形の建物で、時期については、7 世紀後半以前の古墳時代後期に属すると考えられます。

土坑は、調査区内に散在し、平面形は楕円形のものが多くあります。2 区北東部で検出した 6～8 号土坑は、隅丸長方形を呈し、いずれも形状や規模、主軸方位が類似し、ほぼ等間隔に並んで検出されている点で特徴的です。

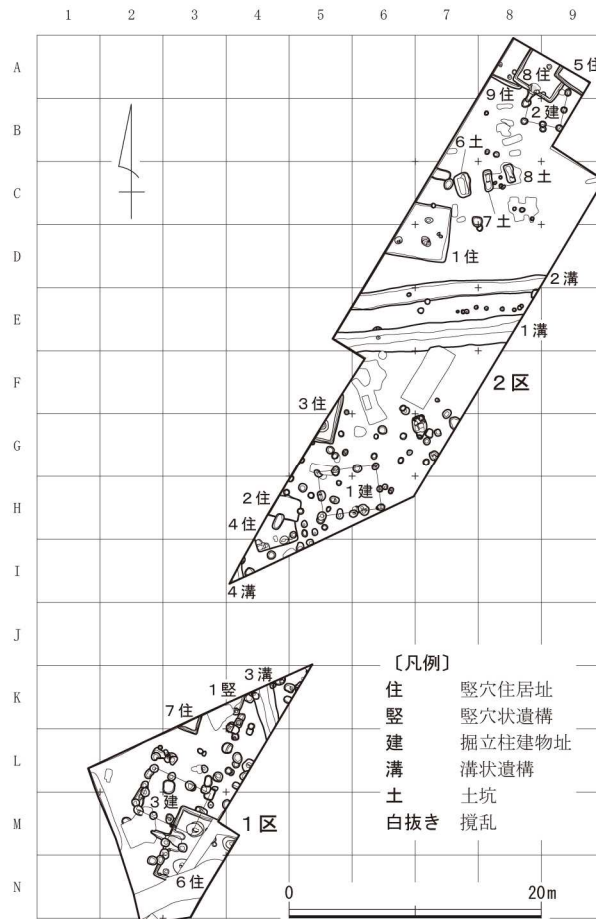
中世に属する遺構は、溝状遺構を 4 条検出しました。1・2 号は並行して東西方向に直線的に延びています。3 号、4 号は、同一軸線上に延びることから、同一遺構であると考えられ、南北方向からやや西に振れて延びています。詳細は不明ですが、走行方向や規模・形状から、区画施設等の可能性が考えられます。

まとめ 今回の調査では、7 世紀後半から 9 世紀後半にかけての竪穴住居址を中心とする集落跡を検出しました。本調査地点の北東側に隣接する第 2・3 地点や周辺に位置する田中・酒林遺跡、田中・聖原遺跡などの遺構構成についても、古墳時代後期から平安時代を通して主に

竪穴住居址が遺構の中心となっており、掘立柱建物址は少数です。時期は古墳時代後期から奈良時代初頭が多く、8世紀中葉以降、遺構数を減少しながら10世紀代まで継続し、11世紀に

は集落は途絶えます。

本調査地点においても、遺構密度はやや低いですが、遺構構成・時期について周辺の調査地点と同様の傾向を確認することができました。



第1図 主要遺構配置図 (S=1/600)



写真1 1区全景 (北西から)



写真2 2区全景 (北東から)

10 (仮称) 桜台一丁目遺跡

所在地 伊勢原市桜台1丁目512-1ほか

調査期間 平成27年8月10日～10月7日

調査面積 1,320 m²

遺跡の立地 (仮称) 桜台一丁目遺跡は伊勢原市中央部に所在し、小田急電鉄小田原線伊勢原駅より南東約0.3kmに位置します。

地形的には大山山麓から南東へ伸びる伊勢原台地の南縁部に該当します。周辺の地形は北から南に向かってわずかに傾斜しており、現地表面での標高は、調査区南西の台地部で約33mを測ります。

調査の成果 (仮称) 桜台一丁目遺跡が立地する伊勢原市伊勢原地区は、古墳時代から近世の遺跡包蔵地として知られています。周辺では、本地点を含めて5カ所の発掘調査が行われており、竪穴住居や中世建物跡、道状遺構などが発見されています。

今回の調査では、B区で平安時代の住居跡2軒が検出され、南側に展開している天王原遺跡群の集落の北限と考えられる遺構群が発見され、住居跡の北側には区画溝と考えられる溝状遺構が南北方向に検出されました。

中世では、B区の平坦面では方形又は矩形くけいに巡ると思われるL字状の溝状遺構が1条検出されましたが、その内側には明瞭な建物跡は発見されていません。東側ではやや弧状こじょうを呈する溝状遺構が1条検出されていますが、性格は不明です。

A区では全体にローム層まで掘削される事業がなされ、谷間状の窪地を呈しています。南壁中央部に沿った地点が最も高く、平場を

形成していますが、建物跡は発見されていません。その平場から東方向へ少しずつ下がる段切りが2段作られており、2段目の段切りの縁に沿って墓坑が構築されています。さらに下がった平坦面にも多数の墓坑が作られ、各墓坑からは人骨が出土しています。南西隅の窪地(1号竪穴状遺構)では竪穴の斜面に沿って投げ捨てられたような状態で多数の人骨が発見されました。A区の南半分は最も低く、井戸跡や地下式坑、巨大な竪穴状遺構などが検出されています。

近世では、A区は畑地であったと考えられ、うね畝状の窪みに堆積した宝永火山灰ほうえいかざんばい(1707年富士噴火の噴出物)が多数検出されました。また、この火山灰を廃棄するための土坑・溝がA区・B区・E区でも検出されています。



B区 1号住居跡全景（西より）



A区 人骨出土状況（南より）

11 (仮称) 沼目 2 丁目遺跡

所在地 伊勢原市沼目 2 丁目 91-1 ほか
調査期間 平成 27 年 10 月 19 日～10 月 29 日
調査面積 140 m²
遺跡の立地 (仮称) 沼目 2 丁目遺跡は伊勢原市南部の東寄りに所在し、小田急電鉄小田原線伊勢原駅より南東約 1.2 km、伊勢原市役所より南南東約 2 km に位置します。

地形的には大山山麓から南東へ派生した伊勢原台地の南縁部に該当します。周辺の地形は西から東に向かって緩やかに傾斜しており、現地表面での標高は、約 33m を測ります。
調査の成果 今回の調査では、南側地区で平安時代の住居跡 1 軒、中世の溝状遺構 1 条・堅穴状遺構 1 基、北側地区で平安時代の住居跡 1 軒が検出されたため、発掘調査を行いました。中央地区の遺構検出作業では、平安時代と思われる堅穴住居跡 1 軒、掘立柱建物跡と思われる柱穴が 10 基ほど検出され、中世と思われる堅穴状遺構 2 基、南側地区から延びる溝状遺構、近世以降と思われる土坑・ピット、溝状遺構などが検出されています。

発掘調査により、南側地区で検出された 2 号住居跡は北東コーナー付近にカマドをもつ堅穴住居跡で、西側を調査開始前の掘削によって大幅に削られていました。しかし、壁高が約 80 cm 近くを測る掘り込みの深い堅穴住居跡で、約半分が調査区外にあたります。北西コーナー付近には、中世の薬研堀の溝状遺構が住居跡を壊してつくられ、住居内で直角に屈曲し、東壁を少しでたところで留まっていた。住居跡内からは平安時代(9 世

紀代)の土器が出土しており、数多くの土師器甕片・坏片、少量の須恵器甕片・坏片・蓋片や灰釉陶器片が見られます。鉄製品として刀子が 1 点出土し、特異な遺物としては土錘が数点発見されています。

住居跡は長期にわたる使用がうかがえる硬化した貼り床面が 4 面検出されていて、カマドに使用された黄色粘土や焼土が床面の一部として使用されていました。また、覆土の状況から建て替えと考えられる様子もみられません。また、床下には重複している 6 基以上の床下土坑が掘り込まれており、特殊な使用方法と思われる黄白色粘土を 1 cm の厚さで土坑の底や壁面に貼り付けているものが 1 基検出されています。

1 号住居跡は、北側地区の県道側の擁壁際に僅かに残った範囲に検出され、安全面を考慮して、奥行き 1 m と幅約 6 m の範囲を調査し終了しました。それでもカマドに使用された黄白色粘土層の崩れた残骸や良く硬化した床面・周溝の検出、粘土層の上から出土した土師器甕片からみて、平安時代の住居跡であることが判明しました。

今回の調査では、平安時代の住居跡や確認のみで終わった掘立柱建物跡の発見によって、調査地点が沼目・天王原地区に展開する集落の一部であることが判明しました。また、中世期においても薬研堀の溝状遺構や堅穴状遺構の検出からみて、何らかの生産活動が行われていると推測するに足る遺跡であることがわかりました。



C1号溝全景（南より）



2号住居跡全景（南より）